



福島原子力事故関連情報アーカイブ

Fukushima Nuclear Accident Archive

Title	福島第一原子力発電所事故前後の放射線利用等に関する世論の動向とその考察
Alternative_Title	The trend of public opinion for using of radiation before and after the Fukushima-Daiichi nuclear power plant accident
Author(s)	坂井 識顕(日本原子力文化財団), 高橋 格(日本原子力文化財団), 船越 誠(日本原子力文化財団), 富山 雅之(御徒町台東中学校), 高嶋 隆太(東京理科大学), 木村 浩(パブリック・アウトリーチ), 川上和久(国際医療福祉大学), 飯本 武志(東京大学) Sakai, Noriaki(Japan Atomic Energy Relations Organization); Takahashi, Itaru(Japan Atomic Energy Relations Organization); Funakoshi, Makoto(Japan Atomic Energy Relations Organization); Tomiyama, Masayuki(Okachimachi-Taito Junior High School); Takashima, Ryuta(Tokyo Univ. of Science); Kimura, Hiroshi(Public Outreach, NPO); Kawakami, Kazuhisa(International Univ. of Health and Welfare); Iimoto, Takeshi(Univ. of Tokyo)
Citation	第 54 回アイソトープ・放射線研究発表会要旨集, p.103 54th Annual Meeting on Radioisotope and Radiation Researches
Subject	セッション：放射線の検出器及び検出法(3)
Text Version	Publisher
URL	http://f-archive.jaea.go.jp/dspace/handle/faa/141723
Right	© 2017 Author
Notes	禁無断転載 All rights reserved. 「第 54 回アイソトープ・放射線研究発表会要旨集」のデータであり、発表内容に変更がある場合があります。



福島第一原子力発電所事故前後の放射線利用等に関する世論の動向とその考察

The trend of public opinion for using of radiation
before and after the Fukushima-Daiichi nuclear power plant accident.

日本原子力文化財団^{*1}, 台東区立御徒町台東中学校^{*2}, 東京理科大学^{*3},
NPO 法人パブリック・アウトリーチ^{*4}, 国際医療福祉大学^{*5}, 東京大学^{*6}

○坂井 識頭^{*1}, 高橋 格^{*1}, 船越 誠^{*1}, 富山 雅之^{*2}, 高嶋 隆太^{*3}, 木村 浩^{*4}, 川上 和久^{*5}, 飯本 武志^{*6}
(SAKAI, Noriaki^{*1}; TAKAHASHI, Itaru^{*1}; FUNAKOSHI, Makoto^{*1}; TOMIYAMA, Masayuki^{*2};
TAKASHIMA, Ryuta^{*3}; KIMURA, Hiroshi^{*4}; KAWAKAMI, Kazuhisa^{*5}; IIMOTO, Takeshi^{*6})

1. はじめに

原子力や放射線に対する世論は、事故や災害などの出来事があるごとに変動する傾向があるため、2006年度から継続的に同じ手法を用いて全国規模の世論調査を実施してきた（2016年度で10回目）。

本調査は、（一財）日本原子力文化財団が（一財）電力中央研究所より請け負い、有識者で構成された委員会で議論した結果を取りまとめ、経年変化の分析を行っている。詳細な結果は日本原子力文化財団のホームページ上で公開している。http://www.jaero.or.jp/data/01jigyoyou/tyousakenkyu_top.html

2. 世論調査の実施方法

対象：全国 15～79 歳男女個人（1200 人）、サンプリング：住宅地図データベースから世帯を抽出し個人を割当、標本数の配分：200 地点を地域・市郡規模別の各層に比例配分、手法：個別訪問留置調査

3. 調査結果

【関心】2011年と2012年を比較すると、「放射線による人体の影響」への関心は高まった（+8.5p）。

【認知度】福島第一原子力発電所の事故前後の2011年と2012年を比較すると、「自然界にある放射線（+15.0p）」と「放射線と放射能の違い（+7.9p）」の認知度が高まった。一方で、「放射線量と人体への影響の関係（-3.6p）」の認知度は、変化が見られない。

【イメージ】2016年度は「危険 72.1%」、「不安 50.9%」、「悪い 23.8%」、「複雑 22.4%」という否定的なイメージが上位項目。次いで、「役に立つ 19.6%」という肯定的なイメージが続く。事故後も大きな傾向は変わらない。2011年と2012年で大きな差が見られた項目は、「役に立つ（-11.8p）」というイメージ。一方で、「危険」、「複雑」というイメージは、事故前後であまり差が見られなかった。

4. 考察

福島第一原子力発電所の事故により、環境に放射性物質が放出され、多くの住民の避難や食品の流通規制、放射線による健康影響など、放射線に関する様々な情報が多くの国民に届いたことが推測される。その結果、放射線が自然界に存在することなどの基本的な情報に対する認知度が向上したが、放射線量と人体への影響に関する認知度は変化していない。放射線に対するイメージは、事故後、「役に立つ（有用性）」のイメージがマイナス側に推移した。一方で、放射線は、事故前から「危険」、「複雑」とイメージされ、事故後もその傾向は変化していない。

事故後、放射線による健康影響などに不安を抱いたことで、放射線の有用性に対するイメージを中心にマイナス側に影響を与えたと考えられる。不安を軽減させるため、放射線による人体の影響に関する確かな情報発信が求められる。

^{*1} JAERO, ^{*2} Okachimachi-Taito JH School, ^{*3} Tokyo Univ. of Science, ^{*4} Public Outreach, Non-Profit.,

^{*5} International Univ. of Health and Welfare, ^{*6} Tokyo Univ.